



福崎かずたろう

3ヶ月ぶりです、ご無沙汰いたしておりました。この3ヶ月、けっこう真剣に教員採用試験に取り組んでおりましたもので、休筆と相成りました。ごめんね。で、試験日の夕方に、さっそく合格前祝いをやってくれたみんな、どおもありがとうございます。来年もまたやってね（コラコラ）。ということで、今月は再筆第1回ということで、ま、リハビリという事で・・・

第11回 クラクションって何なんだ！

広辞苑で『クラクション』ってひいてみたら、『クラクソン』の訛ったものと書いてありました。で、K l a x o nとは・・・「電磁石の作用で鳴らす自動車などの警笛」だそうです。当たり前だわな。ということで、クラクションとは、まあ、警笛なんだ、と、言うことができるわけなんですけど・・・。

さて、いきなりだけど、クラクションって必要なのかなあ？ というより、けっこう無駄に、あるいは本来の用途以外の方に、使われている気がしてならないわけですよ。

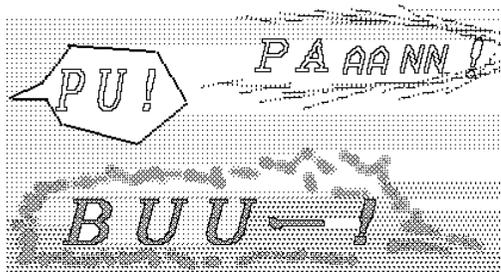
つづら折りの山中ならともかくも、街中で、警笛としてクラクションを使用することが、そうそうあるでしょうか。まず、無い、と私は断言します。

「そんなことはない、見通しの悪い交差点なんか無いと困るやないけ！」という方は、それはきっと、スピードの出しすぎです。どんなに見通しが悪くても、安全が確認できるころまで徐行をし、通過すれば良いのではないのでしょうか。そして、クラクションが本来の警笛という目的を達するという事は、同時に周辺住民の騒音という、公害になっているということなのです。この事実に関

付けば、クラクションはそうそう鳴らせるものではない、と理解していただけると幸いです。

しかし、クラクションの用途としては、警笛以外の方が多いのではないか、と私は感じている。警笛以外とは、つまり、挨拶とか、感情表現とか、ということですよ。

挨拶というのは、狭い道路で自動車同士が進路の譲ったり譲られたりという場面で「やや、どおすみません」とか「いえいえ、どういたしまして」とか言う代わりに、クラクションをプッ！とかパッ！とか軽く鳴らすことを指すのである。擬音が半濁音であることがミソである。プッ！とかブゥー！とか濁音



になってしまうと、ちょっと挨拶として適当ではなくなってしまう。であるから、こういう場合は、さっとクラクションにふれるようなソフトタッチでやらなくてはいけないが、これがけっこう難しいのだ。で、まあ、そんな事は誰でもよ

ろしいが、この当事者同士の美しいエールの交換も、やはり、周辺住民にとっては、単なる騒音である、という事を忘れてはいけない。

単に「どもども」「いえいえ」という事を表現したいなら、クラクションなんてものを使わなくても、実際に手をあげるなり、それが危ないと言うのなら、軽く頭を下げるだけで良いことなのだ。プッと軽快に鳴らしつつも、素知らぬ顔で行ってしまうよりはよっぽど良いのだ。また夜間など、相手の車内が見えないときなどは、点灯していたライトを通り過ぎる瞬間まで消しておくなどする事によって、十分意志の疎通は計れると思う。

しかし、偉そぶって書いているお前は、クラクションを鳴らさないかと言うと、断じてそんな事はないのである。しかも、私はあまり質の良い使い方ではないのだ。同乗された方なら分かると思うが、とにかく私は違法駐車などの反社会的行為に大いに憤りを感じるタチなのだ。で、どうするかというと、邪魔な違法駐車車両の横を通り過ぎるとき、思いきりクラクションを鳴らしてやるのだ。もちろんドライバーがいるときだけやけど。どうもこういった連中にだけは、頭に血が昇って感情的になってしまうのだ。いかん、言葉遣いまで荒く

なっているぞ。 ということで、感情表現、特に「イカリ」の表現として、クラクションはよく使われてしまう。しかし、まあ、これはたいへん危険である。

以前、渋滞中の車から発せられたクラクションが原因で、殺人事件が起こった事がある。この例は極端であるが、一般にクラクションの音は不快なものが多いので、他人に向けられたものであると判っていても、やはり気持ちの良いものではない。ドライバー同士がギスギスした関係でいると、流れもスムーズなものにはなりにくいものだ。

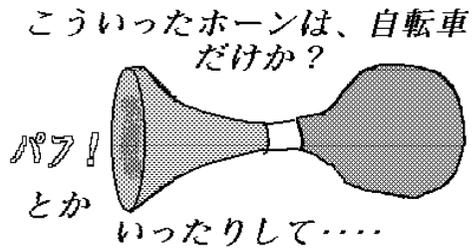
次にクラクション自身に目を向けてみると、これって、けっこう昔から進歩していないのではないだろうか。自動車はここ10年くらいの間、内装 外装 機構に装備と、さまざまな進化を続けてきた。そんな中で、クラクションは忘れられているかのように、ぼつんと昔のままの形態・様式で現代の自動車の中に組み込まれているのだ。

そこで私は考えた。全段落での問題解決のためにも、次に挙げるクラクションの改良を提案する。

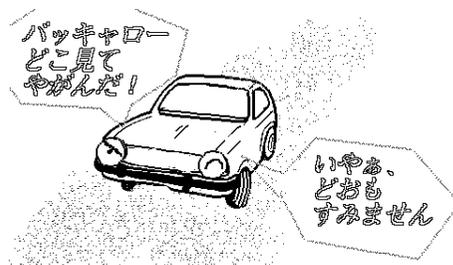
1. 多方向クラクション
2. 音色別クラクション

1. は、街中など前後左右にひしめいている自動車に対し、どの方向にクラクションを鳴らしたのかを明確にするためである。方向を限定し、対象域を絞ることによって、クラクションの音そのものを小さくできるかもしれない。

2. は、現在のクラクションでは、車種によって音色が決まっており（Kカーならピーー、ハイソカーなら重厚にボワァンとか）、それを強く押すか、軽く触れるかによって、ドライバー自身が強弱を調節している。これはけっこう神経を使うものなので、あらかじめ、何通りかの音色と強弱をヒーターの温度



調節の要領でインプットしておき、状況に応じて押せるようにしたらどうだろうか。ボタン1は挨拶用に、なごやかな音色で小さな音。ボタン2は山道を走るときのために。ボタン3は街中で、怒りを表すために。なんてね。



1. と2. を併せればけっこういけるかもしれないなあ。実用新案でも取っとうかな。

最後に、いずれにしても、クラクションは鳴らさない方がよいのです。

クラクションを鳴らす必要もないような社会を、鳴らされることのない運転マナーを、鳴らす必要の無い安全な運転を、そして鳴らす所が無いような安全な道路を、我々は目指すべきでありましょう。